

第 35 回 甲南英文学会研究発表会・講演会レジュメ

研究発表 14:00~16:00

[英語学部門] 224 講義室

司会：福田稔（宮崎公立大学）

1 チュートリアル「形式意味論の基本的な考え方について

ー外延, 内包, 可能世界に焦点を当ててー」

中谷健太郎（甲南大学）

本チュートリアルでは、形式意味論（真理条件意味論）の基本的な考え方を紹介し、次の志田・中谷の研究発表の導入とする。ご存知の通り、形式意味論では言語表現の意味を、外延を通して規定する。しかし形式意味論の外の研究者からすると、果たしてそのようなアプローチで意味を十分に捉えることができるのだろうかという疑念が浮かぶかもしれない。

ここでよく引き合いに出されるのが、フレーゲの *sense* (Sinn) と *reference* (Bedeutung) の対立であり、*sense* とは *reference* を規定する特性であると言われる。すなわち、意味の本質は *sense* にあり、*reference* はそれに付随する言語表現の特性であると考えられる。そうなるとなすすま外延から意味を捉えることに限界はないのかと心配になっても不思議ではない。

しかし、可能世界意味論を導入すれば、*sense* を必ずしも分析的な意味特性として考えなくても良くなる。すなわち、内包を可能世界の集合とするならば、*sense* も可能世界における *reference* の集合として捉えることが可能になる。

本チュートリアルでは、可能世界をベースに *sense* を規定することの利点について、ごく簡単に議論する。

2 「1回/1回だけ」が導く *semelfactive* と *activity* のアスペクト解釈の違い

志田祥子（甲南大学大学院博士後期課程）・中谷健太郎（甲南大学）

動詞アスペクトにおける分類に *semelfactive* (e.g., *blink*) と *activity* (e.g., *run*) があるが、どちらも進行形を適用でき、継続的解釈を持つという点が共通点としてあげられる。

- (1) a. John is running.
b. John is blinking.

(1a)の activity 動詞 run は「走る」という一連の動作が,(1b)の semelfactive 動詞の場合は、「まばたきをする」という動作が継続して行われるという解釈ができる。しかし、これらに対して、Nauman (2001)は、activity 動詞についてある状態からある状態への移行の連続としており、Croft (2012)では、ある小さなイベントが連続して行われることで、継続解釈が生まれるとしている。また、semelfactive について、Moens and Steedman (1988)は、本来は単一解釈だが、進行形を適用することで、アスペクト解釈の調整が起こり反復解釈が生まれるとしている一方、Shida and Nakatani (2017)では、デフォルトの解釈が反復か単一かということは、語彙の選択によって決まるという主張がなされている。

本研究では、(i) activity の連続性がイベントの反復によって生じるという実験的証拠があるのか(ii) semelfactive の本来の意味は単一なのか反復なのかという問題に対して Ippolito (2008)などが提案した” only”(一だけ)が持つ前提文脈を用い、検証する。

- (2) $[[\text{only}]]_w = \lambda C \in D \langle \langle \text{st} \rangle \text{t} \rangle. \lambda p : p \in D \langle \text{st} \rangle \text{ and } p(w). \forall q \in C(q(w) \rightarrow (p \subseteq q))$

Ippolito (2008)は、only によって考えられる全ての代替命題が想定され、それらが問題となる命題と同じか、より弱い命題のみが成り立つ場合のみ真となるという理論を提案した。

ここから、「1回」と「1回だけ」を実験文と共起させると、「1回だけ」は「2回、3回…」という前提条件を想定しなければならないという特性を用い、自己ペース読文実験を行った。

- (3) a. コウキが /{1回 | 1回だけ}/ 泣いたと / 後輩は / コーチに / 告げ口した。
b. コウキが / {1回 | 1回だけ} / 頷いたと / 後輩は / コーチに / 告げ口した。

実験の結果、動詞領域において、activity は、「1 回だけ」の読み時間が「1 回」よりも遅いという結果が見られた一方で、semelfactive では、読み時間の違いが観察されなかった。この結果は、semelfactive は本来的に反復であるということ、また activity は全体が 1 つのイベントとして、捉えられているということを示唆している。

【 英米文化・文学部門 】 223 講義室

司会：岩井学（甲南大学）

1 ヒーロー不在の物語 — 「母と娘」における風刺される女たちの行末—

横山三鶴（甲南大学非常勤講師）

D・H・ロレンスの作品にはしばしば「支配する女性」が登場する。女性の支配欲は「貪る母」の母性を象徴する母親の特性でもあり、ロレンスの作品の中では、支配する母親の存在は息子たち（時に男性）にとっての悲劇として語られてきた。では、娘たちにとってはどうなのか。80 篇近くある短編小説の中で、たとえば初期の「牧師の娘たち」、中期の「馬仲買の娘」では、母親の存在感は薄い。しかし、「家」という閉鎖的な空間、古い価値観や階級意識が根付いたままの社会で、ロレンスの描く娘たちは次第に行動する娘へと変容し、自己を解放し、新たな生に目覚めていく。その再生のストーリーこそ、ロレンスが描き続けてきたものだった（はずだ）。そして娘が目覚めるために欠かせないのは、ヒーローの存在である。様々な男女の有様を描く中で、ロレンスは常に理想となるヒーロー像をも模索し続けていた。こういった一連の娘物語の中で、晩年に執筆された「母と娘」は母親と娘に焦点をあてているという点で、異質な作品であるといえる。そこで、本発表ではこの後期の短編「母と娘」に注目し、母娘の関係がどのように展開されているのかを考察する。

「母と娘」は 1928 年 5 月に執筆され、翌 29 年 4 月に雑誌 *New Criterion* に掲載された。そしてこの作品を最も特徴づけているのは、徹底した風刺である。これまでの娘物語と異なり、終始軽妙な語り口で語られ、ストーリーを文字通り支配する母親は、「魔女」と揶揄され、残酷なまでに風刺されている。親密すぎる母娘の関係ゆえに最初の男性は娘から去り、母親が結婚させたい男性に娘は関心を示さず、母親との生活に疲れ果てた娘が最終的に結婚相手として選んだのは、母親とほぼ同じ年齢の父親的男性であった。失望した母親は娘の人生

から退散する。娘は母親の支配から解放され新たな人生を選択したはずなのだが、その結末はあたかも母権制から父権制に移行しただけのような展開である。つまり娘を目覚めさせるヒーローの役割を担う男性が登場しないのだ。さらにこの作品では、娘も同様に「娘魔女」として風刺の対象となっている。魔女対魔女という構図。なぜロレンスは娘側の視点に立つことをせず、徹底した風刺という表現方法を選択したのか。エッセイ「母権制について」とともに、これまでの娘物語とも比較しながら、再生物語とは異なるテキストの読みの可能性を探りたい。

司会：浜本隆三（甲南大学）

2 ジェイムズの『死者たちの祭壇』とトリュフォーの『緑色の部屋』における生と死——アダプテーション理論を援用して

中井 誠一（島根大学）

リュミエール兄弟がシネマトグラフを使った史上初めての「動く映像」をパリで上映した、すぐ翌年の1896年に、ゲーテの『ファウスト』を題材とした短編動画が制作され、文学作品から映画への初の「翻案」（アダプテーション）が行われている。以来、膨大な文学作品が映画化／翻案され、数々の名作が生み出され、文芸映画は映画芸術の中で、ひとつの重要な地位を占めることになった。また同時に批評分野では、文学作品からの翻案という観点から映画作品を考察するケーススタディーが1950年代以降広範に行われ、現在まで続くアダプテーション研究の隆盛に繋がっている。しかし、2000年代からアダプテーションに関する新たな理論が、ロバート・スタムやリンダ・ハッチオンなどによって模索されるようになった。それは、アダプテーション研究の対象を、単に映画のみならず、ドラマ、ゲーム、テーマパークなど様々なテキストやメディアへと広げ、しかも「原作」から「翻案」の一方向で論じられてきた評価を、双方向的に考察し直そうとする実験的な試みである。

ヘンリー・ジェイムズの「死者たちの祭壇」（1895）のアダプテーションである、フランソワ・トリュフォーの『緑色の部屋』（1978）は、ビクトリア朝時代のイギリスを、1920年代のフランスに背景を移してはいるが、「死者を敬う」というテーマが、ふたつの作品に共通した底流となっていることに変わりはない。しかし、双方の、死者への想念は、その根本的な質において大きな違いを

見せているように思える。この発表では、アダプテーション理論の概要を紹介し、その理論を一部援用しながら両者の作品を比較分析し、トリュフォーが『緑色の部屋』を制作する上で、「死者たちの祭壇」に深い理解を示しながらも、その意匠をどのように翻案し、〈死者〉の物語に新たな〈生命〉を吹き込んでいるかを検討してみたい。

講演会 16:20-17:30

司会 : Nigel Duffield (甲南大学)

日本語と英語の「指定文」について(The specificational sentence in Japanese and English)

西垣内 泰介・神戸松蔭女子学院大学教授

(1)「東京は日本の首都だ」は「東京って何？」に対する答えとして可能であり、「東京」に関してその特性などを述べる文(措定文, predicational sentence)ですが、(2)「東京が日本の首都だ」は「日本の首都はどこ？」に対する答えとして適切な、むしろ述部の方が主語と考えられる文で、言語学では「指定文」(specificational sentence)と呼ばれるものです。(2)は(3)「日本の首都は東京だ」と意味が等しいと考えられ、(3)のような文を「倒置指定文」(inverse specificational sentence)と呼びます。

英語では(4) Tokyo is the capital of Japan. は(1)の「措定文」の意味と(2)の「指定文」の意味の両方が可能です。これは英語に日本語の「は」「が」の区別がないからだと考えられます。(5) The capital of Japan is Tokyo. は「指定文」としての解釈においては(4)と同じ意味になります。

西垣内(2016)では(2)のような「指定文」は(6)[日本の[東京(という)[首都]]]という構造を持つ名詞句から「東京」が焦点化されて統語的に派生するという分析を提案しています。それによって(7)「東京xが[日本の[x[首都]]だ」という構造が得られます。これは、「首都」を「関係」を表す関数の述語と考え、

(8) {x | 首都(日本, x)} という集合における x の値が「東京」だというのが(2)の意味だと主張していることになります。「首都」のような名詞は国(の名前)と都市(の名前)の間の「関係」を表すということです。(8)「東京が日本の都市だ」は悪い文ではありませんが、(2)と異なり、「リヨン、ヴェネツィア、東

京, 釜山の中では」といった選択肢を必要とする「総記」(exhaustive listing) の解釈でのみ可能です。

このような「指定文」の分析のひとつの証拠となるのが「自分」という再帰表現のふるまいです。通常は (9) 「山田さんが自分の息子をほめた」 vs. 「*自分の息子が山田さんをほめた」に見られるように、「自分」はその先行詞に先立って現れるものです。しかし、次の「指定文」においては「逆行束縛」が見られます：(10) 「自分の学歴（だけ）が山田さんの誇りだ」。本分析では、(10) は次の名詞句から派生すると考えます：(11) [山田さんの [自分の学歴（という） [誇り]]]。この名詞句の中で「山田さん」が「自分」に先行し、構造的には上位の位置にあることが(10)における「自分」の容認性を説明します。英語でも、(12) *A picture of himself with Prof. C. is John's treasure.* のような「逆行束縛」の現象が見られます。

この発表では、日本語と英語の「指定文」の多様な特性を取り上げ、現代の言語理論の考え方を示して行きます。

西垣内泰介 (2016) 「「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150: 137-171.